

## ゼミ指導の構築と充実について

### On the construction and improvement of seminar instruction

小 竹 光 夫\*

要旨：改組・開設された新しい人間教育学部においては、3年次に「人間教育学ゼミナール（基礎）」、4年次に「人間教育学ゼミナール（応用）」の2講座が必修科目として設定されている。これまでの講義を中心とした学習ではなく、個々が設定した課題を探究していく能動的・主体的学習が始まるわけであるが、運営に際しては学習者・指導者ともに数多くの課題を抱えている。特に学士課程での学びの充実は社会的要求でもある。その視点から「ゼミ指導の構築と充実について」というテーマを掲げ、基礎的な分析と考察を加えた。

キーワード：学士課程 人間教育学ゼミナール ゼミ指導

#### はじめに

極めてアバウトな言い方をすれば、論者が専門とする書写書道教育という領域において、習得期の学習指導にはかなりの手続きと配慮・段階を必要とする。ある意味、そこでの指導が周到に行われれば、活用段階は円滑に展開していくとさえ言えるだろう。このような手続きや配慮・段階を必要とするのは、言語というものへの概念自体が形成されない状態で、その形成と言葉や字形の習得・定着が同時進行で行われていくことから

---

\*奈良学園大学人間教育学部教授

る困難さである。例えば、「雨」というものがどんなものであるのかとの概念を理解させながら、「あめ」や「う」という読みを教え、活用へと導き、「雨」という字形・字体を習得させることが必要になるからである。一定の基盤が存在する上での学習指導に比し、概念自体が無である状態に知を注入していく学習は困難を極める。

新しく組織された大学・学部においては、この言語習得期と同様の困難が眼前に山積していると言っても過言ではあるまい。特に基礎的な学力保障がない場合、その道のりはさらなる厳しさを増していく。

本学は、2014年に改組・開設された人間教育学部という学部を有している。本年、ようやく4学年が揃うという完成年度を迎え、一通りの形態を整えたということにはなる。ただし、3年次から開始する「人間教育学ゼミナール」（3年次は「基礎」、4年次は「応用」）の在り方については、各教員・ゼミナール毎に腐心と試行が続いているのが実状であろう。特に、4年次後期に「卒業研究」という選択科目を設定していることから理解できるように、いわゆる「卒業論文」が「人間教育学ゼミナール」に直結するものでなく、また卒業要件として設定されていない場合、指導の在り方を巡ってはさまざまな論議が生じることとなる。

本論においては、「学士力の充実」という視点から、主体的に課題を追究していく過程において、相互作用が重要とされる「ゼミの在り方」について、幾つかの課題を提示し、今後の検討の起点としておこうと考えている。

## I 学士力の構築と充実に関して

平成20年12月24日、中央教育審議会が「学士課程教育の構築に向けて（答申）」を提示した。少々、長い引用になるが、その一部を抜粋して論の導入としたい。

2 審議における問題意識は以下のとおり、学士課程教育の構築が、

我が国の将来にとって喫緊の課題であるという認識に立っている。

第一に、グローバルな知識基盤社会、学習社会において、我が国の学士課程教育は、未来の社会を支え、より良いものとする「21世紀型市民」を幅広く育成するという公共的な使命を果たし、社会からの信頼に応えていく必要がある。

第二に、高等教育のグローバル化が進む中、学習成果を重視する国際的な流れを踏まえつつ、我が国の学士の水準の維持・向上のため、教育の中身の充実を図っていく必要がある。

第三に、少子化、人口減少の趨勢の中、学士課程の入口では、いわゆる大学全入時代を迎え、教育の質を保証するシステムの再構築が迫られる一方、出口では、経済社会から、職業人としての基礎能力の育成、さらには創造的な人材の育成が強く要請されている。

第四に、教育の質の維持・向上を図る観点から、大学間の協同が必要となっている。

3 本答申は、いわゆる学部段階の教育を「学士課程教育」と称している。これは、将来像答申において、「現在、大学は学部・学科や研究科といった組織に着目した整理がなされている。今後は、教育の充実の観点から、学部・大学院を通じて、学士・修士・博士・専門職学位といった学位を与える課程（プログラム）中心の考え方に再整理していく必要がある」との指摘を踏まえている。今後、我が国において、上記の観点から学士課程教育を構築するには、学部・学科等の縦割りの教学経営が、ともすれば学生本位の教育活動の展開を妨げている実態を是正することが強く求められる。

本答申を契機として、「学士課程教育」という概念が、大学関係者はもとより、一般に広く理解されることを期待したい。

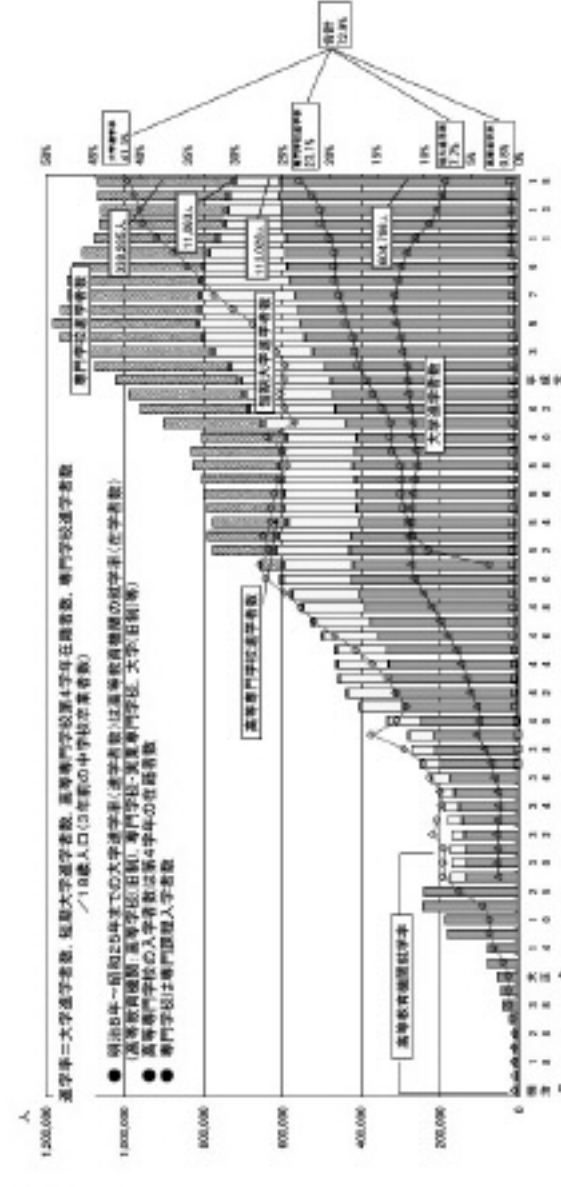
大学院に進み、研究や実践の高度化を求める道も当然のこととして選択

肢の中にある。しかし、「答申」が述べる大学全入時代が到来したかに見えるものの、大学院への道は「以前に比べれば選択しやすくなった」との表現を付け加えない限り、総ての学生たちに拓かれているわけではない。つまり、多くの学徒にとって、直面している学士課程の教育が、社会人に至るまでの最後の組織的教育とすることができよう。つまり、各大学ごとに、各学部ごとに状況的格差はあるにせよ、学生と対峙する教職員が心得て取り組まなければならない4年間なのである。その意味において、「答申」の「第三に、少子化、人口減少の趨勢の中、学士課程の入口では、いわゆる大学全入時代を迎え、教育の質を保証するシステムの再構築が迫られる一方、出口では、経済社会から、職業人としての基礎能力の育成、さらには創造的な人材の育成が強く要請されている。」は、学士課程における充実の具体を示していると言える。

文部科学省が提示する「大学進学率の推移」(図1)を見る限り、「全入」というのが「大学進学を希望するものは総て」という意味であることは明らかであるが、少なくとも50%を越える進学率の中で、目的や目標は曖昧になってくるのは必然とも言えよう。大正から昭和中期の進学率程度であれば、「学びたい」という表現で目的・目標を括ることができるかも知れないが、現在では「とりあえず大学へでも行っておこう」というものから「学びたい」まで千差万別、多種多様な思いや目的が存在している。そのため、「大学というものは学ぶためのものだ」と観念的に信じている指導者層は、衝撃的なカルチャーショックに遭遇することとなる。

とはいえ、大学が学びのための機関であることを放棄することはできない事実である。それを失えば、大学の存在価値そのものが消失する。このような多種多様な目的・目標の中で大学に辿り着いてきた学生たちに、学生として、社会人として、人間としての「力」をつけていくことは、加えて忘失してはならない課題である。

大学・短期大学の入学数及び進学率の推移



(出所)文部科学省「学校基本調査」(昭和25年以降)について(文部省年報)。

図1 大学・短期大学の入学数及び進学率の推移

## II システム上の課題

前任兵庫教育大学では、修士論文等とは質量ともに明らかに低位であるものの、卒業論文（含卒業研究）は卒業要件として必須のものであった。そのため、目的観を明らかにし、どのゼミで学ぶかの選択をすることは、自らの将来を形成することに直結する大きな課題となっていた。当然のこととして、一研究・論文を作成し、仕上げていくことは覚悟を必要とする営みであり、それこそ「ゼミ活動は24時間体制で臨まぬ限り不可能である」とさえ捉えられていた。情緒的な表現ではあるが、苦悩し涙を流しながらも、論を紡ぎ出す日々を繰り返していた数多くの学生たちの姿は、指導教員たちの支えようとする意欲とも繋がっていた。ただし、冷たい表現ではあるが、研究や研究論文の質は個人が熱心に取り組んでいたなどという表現で担保されるものではなく、また各大学のレベルによって左右されるべきものでもない。そういう基本的な理解がない限り、単なる雑文を研究論文という名にすり替えてしまう危険性を有している。それは向上でも進化でもなく、単なる墮落にしか過ぎない。

本学において、「卒業論文」の作成は卒業のための必須要件とはなっていない。課題意識をもった研究活動の起点となる「人間教育学ゼミナール」は、3年次開始の「基礎」と、4年次開始の「応用」から構成され、授業時間割の一コマ（通年30週）として位置付けている。しかし、それをもって卒業論文を完成させることは、どのように考えても不可能である。そのため、意欲を持ち、卒業論文を作成しようとする学生のためには、4年次後期に、「卒業研究」が選択科目として開設されている。

「果して、その時間的配分で論文作成ができるのか」との疑問もあるだろう。できるか、できないかの疑問は別にして、時間割内に組み込まれるゼミ活動には功罪があるのが当然である。部活やアルバイトに多くの時間をとられている学生にとって、定時内に大学のゼミ活動が終了するのは大きな利点である。ただし、不足分は課外の指導に頼ることになる。学生に

も、教員にも繰り返し時間調整しなければならない労力と、勤務時間等を越えた過重な負担が二重に降りかかってくることになる。それならば、「ゼミ活動は24時間体制で臨まぬ限り不可能である」と決断し、最初から取り組む方が二重負担を回避できるとさえ考える。まして、「卒業研究」がスタートして以降も、併行して進行する「人間教育学ゼミナール」を、どのように関連付けて運営していくかという課題がある。加えて、卒業論文が必須の卒業要件となっていないことから、「人間教育学ゼミナール」の終着点を見極めたり、どのような支援体制で臨むかは各教員にとっての大きな課題ともなる。

ゼミ活動は、それまで多くとられていた講義型の「授業」からの脱却であり、個人が課題を見つけ、相互作用の中で深めていく「研究活動」との最初の出会である。しかし、ゼミが時間割に組み込まれていることによって、学生たちは単なる1時間の「授業」を選択しているとの意識しかない持たない場合もある。各大学がさまざまに腐心しながら取り組みを展開している「ゼミ」とは何か、どんな活動をすることになるのかを、徹底して理解させていかなければ充実はあるまい。

## III 学生側が抱えている課題

クリティカルリーディングやアクティブラーニングという耳新しい表現が、教育現場を席卷している。一生を通じて学び続けることの必要性から考えれば、忘れてはならぬ学びの方法であろう。しかし、その表現が飛び交う中で、学習者である学生たちや指導者である教員たちに、受け止めていく上での課題が存在しないかと言えば「否」であろう。以下、3点について事例とともに提示しておく。

端的に言えば、「未熟」というより「未成熟」の学生たちの存在がある。ゼミ選択の理由の中に、「友だちが行くと言ったから、自分もついてきた」というのがあり、愕然とする以上に失望した。これでは、まるで小学生が

クラス替えの際に「仲の良い友だちと同じ組になれなかった」と泣きじゃくるに等しいレベルであろう。経験が少ない若者たちにとって、「未熟である」ことは仕方がない。ただし、身体的成長に精神的成長が追いつかず、いつまでも「未成熟」な言動を繰り返すようでは、「年甲斐がない」と指摘されても仕方がないことであろう。「未成熟」こそが、第一の課題である。

第二の課題は、以下の実態の中から窺い知ることができる。

授業を展開する中でも散見できることであるが、「さて、\*\*について考えて、自分の意見をまとめてみよう」と語りかけても、全く手が動かない学生が散在する。「いつか先生が正解を言うだろうから、それをメモすればいい」とでも考えているのだろうか。手を動かしている学生の場合も、教員の側が「まとめ」を述べると、自分のメモを消して、それを「正解」のように書き付けている。これら一つひとつに現代的学びの問題点が存在しているように思われる。考えることが苦手というより、全く考えずに結論のみを得ようとする学びの方法では、課題に従った主体的学習など不可能に近い。

その状況から発する典型的な事例が、「レポート」と呼ばれる活動に表れる。まさしく情報化時代の寵児たちである。ネットからキーワードを頼りに関連がありそうな情報をコピー（コピー&ペーストの略）し、紙幅を充足させるために連結する。その情報を提供した人間への敬意等を感じているわけではないから、出典・引用を付すことへの配慮もない。まして、常体と敬体が混在していてもお構いなしである。これでは、著作権・知的財産権の侵害に満ち満ちた文書ではないか。論者は、学会論文等の査読を行う学術委員を委嘱されていたこともあり、論文における剽窃については厳格に対応しようとしている。その基本として使用しているのが、「コピペルナーV2」という判定ソフトである。ソフトの説明には、

コピペルナーは、レポートや論文などの文書ファイルを、インターネット上のWebページや他の文書ファイルと比較し、コピペチェック

を行うソフトです。

学生がレポートや論文などを作成する際に、インターネットなどからの剽窃行為が社会問題となっています。コピペルナーは、「考える力や表現する力を養ってほしい」という願いのもとに、金沢工業大学知的財産科学研究センター長の杉光一成教授がしくみを考案し（特許申請中）、株式会社アंकが開発しました。レポート・論文の「試験監督」のような役割として、また剽窃チェックの時間短縮ツールとして、ぜひお役立てください。

※コピペルナーは2009年12月末の発売以来、全国の大学など220校に導入されています。

とある。「全国の大学など220校に導入」の表現からは、各大学の現場での悲鳴が聞こえてきそうである。かつて論者が受け取った某論文が、「コピペの率が75%」と判定され、更にどこから抜き取ったかという一覧を添えて表示されたとき、情報化時代の深い闇を思い知らされた次第である。

ただし、この「コピペ」の蔓延には、指導者側が加担している場合がある。「加担」という表現に語弊があるのを承知で使用しているが、総てがコピペであっても枚数を充足していれば、出欠席の確認のように指導者側が受け取ってしまっていないか。つまり、「内容がどうあれ、枚数分を揃えればレポートになる」という学生たちの風潮は、少なくとも受け取る指導者側の安易さが招いているとの自省は必要であろう。論者自身の大学時代、集中講義の講師であった春名好重氏（国士館大学 古筆研究家）が課されたレポートは、何週間後に朱書きが加えられて返送されてきていた。「\*\*の中で\*\*はそう言っているが、正しくはない」「他にも論がある」「結論付けるには資料が足りない」等々の朱書きを読みながら、力量不足を嘆いたが、書き直して再提出したレポートに「よく調べて結論付けた」と書き加えられていたとき、未熟な自分のレポートを熟読してくれた人がいたことに深い感謝を覚えた。指導者が本気であることが先である。そのこと



からスタートしなければ、この安易なコピペの波は阻止できない。

卑近な例で恐縮であるが、論者は広島大学附属高等学校で高校時代を過ごした。能力・学力が際だった仲間たちの中で、学びの質の低い自分を何度となく恥じた。にも拘わらず、今こうして生きていくことができるのは、そこにあった「結論が全てでなく、どうやって結論に至ったかという学びの過程や、切り込んでいく視点こそが重要なのだ」との教育方針の中で育てられたからである。そんな高校時代を終えて辿り着いたのが、新潟大学教育学部特別教科教員養成課程書道科である。大学での教育方針は、さらに徹底していた。不十分な作品は月一回開催される「条幅研究会」（全学年で行う作品批評会）で、指導者の「見るに値しない、次」という無情な言葉で切り捨てられた。何年生であろうが関係なく、何一つの指導言やヒントもなく、放置された。現代の学生ならば、「親切でない」や「優しくない」と反発するのであろうか。正直、若かった時代には厳しい指導者を恨んだこともある。しかし、そうやって切り捨てられながら一ヶ月、「どこがダメだったのか」と反芻し、試行錯誤を繰り返すことは苦ではなかった。一ヶ月後（時としては数ヶ月後）の条幅研究会で、指導者の「小竹君、この作品はね」との言葉を聞いたとき、「指導者の思いを言い当てた」という限らない充実感があった。もしこれが、最初から「小竹君、ここはこういう形にした方がいいよ」という具体的に立ち入る指導があったなら、その部分を言われるままに是正し、安易な成就感に浸っていたのではないか。嫌われること、さらには憎まれることも恐れず、学び方の過程が必要であることを示し続けた指導者がいたからこそ、我々は一人になっても一生を通じて学び続けることができるのである。だから、「この学び方の習得が確実になされているのか」という部分に、日常、不安を感じ続けている。これが第三の課題である。

「近頃の若者たちは」という傾向性で括る表現はとらない。他者もきつと括られることを潔しとしないであろうし、自らも是としない。だから、

「最近の学生たちは」という括り方でまとめるのではなく、一人ひとりの学生たちが夢描く目標に向かって進む確実な登り道、階段を用意しているかを、詳細に見極めていくことが必要であるように思われる。「褒めて育てる」という昨今の教育方針を全面否定するつもりはないが、安易な成就感を与え続けていると、試みは利那的となり、深化させていくことなく夢を夢のままに終わることとなる。

#### IV 書写書道ゼミの現在



図2 作品制作ゼミの様子

前述の通り、改組・開設された人間教育学部の第一期生は4年生となった。本ゼミの所属員数は9名であり、その内、過去現在に至るまで体育系クラブ（硬式野球部）に所属しているのは7名。まるで体育会系のゼミかと思まごう

ばかりであるが、決してそうではない。体育会系クラブを経験した7名は「作品制作ゼミ」として、卒業論文を視野に入れていた2名は「研究論文ゼミ」として活動を続けてきた。

大きな課題となったのは、「作品制作ゼミ」である。書道科の学生ではないゼミ生に、どのような目的観を与えるかは難しい問題である。まして、正直なところ、彼等は教員という進路志望ではない。ごくごく当たり前卒業論文を書き、教員採用試験を経て教員として生きていくわけではない。高等学校の芸術選択でありがちな、「ただ文字を書いていけば済む」とい

う時間にしては、何のためのゼミかということになる。筆を持って作品を書く。そして、その作品を巡って鉛筆等々を握って文・文章を書く。笑い話のような会話も何度かあったが、活動は4年次になって安定した展開を見せるようになった。後掲・後述する「ゼミ通信」で繰り返し述べたのは、「何かができるということは素晴らしい。しかし、それだけしかできないのでは寂しい。それもできるという、余裕ある自分の可能性を探ってみよう」は、決して間違いではなかったと確信している。

第二期生は3年生となった。所属員数は11名であり、その内、過去現在に至るまで体育系クラブ（硬式野球部・女子バスケットボール部）に所属しているのは10名で、体育会系のゼミ化傾向は加速している。この学年については、「作品制作ゼミ」と「研究論文ゼミ」との区分はしていない。理由は、「野球やバスケットボールしかできないのではなく、研究論文も書けるのだということを実証するゼミ」として運営しようと考えているからである。

とはいえ、これまでゼミ活動というものを経験したことのない学生たちである。一般社会人として必要なメールの確認・対応を徹底することから始めているが、溢れかえる口頭言語（単なる日常会話の文字化）、例えば「こんにちわ」を「こんにちは」に、「すみません」を「すみません」にと苦笑交じりに訂正するというのが正直な状況である。理解して即座に反応する学生もいれば、「自分を認めてくれない」と乱反射する学生もいる。常識的で平凡なことであるだけに、習慣化されてきたものを是正するのは難しい。

「人間教育ゼミナール（基礎）」の段階では、必ず「ゼミ通信」を発行している。（図3、図4参照）授業資料ほどの量はないものの、毎週、話題を考えて文章化するのは相当な負担とはなる。ただ、単なる話として聞き流されるのではなく、文字化し記録化して残していくことは、指導教員としての最低限の責務ではないかと考え、継続してきている。今は理解でき

ないかも知れない。しかし、10年後、あるいは20年後に手元に残っていて、懐かしく自らの足取りを確認してくれるならば、それで良い。そんな思いの中での取り組みは続いている。

「産みの苦しみ」という言葉があるが、まさにそんな日々の繰り返しである。思いと実践にまだ隔たりはあるが、本学の学生たちが学びの力をつけ、一社会人として確実に歩いて行って欲しいとの思いで、幾つかの事柄を書き記した。また、いずれかのゼミが、それぞれの実践の道のりを書き記して下さることを期待して、論を閉じることとしたい。

#### 【引用・参考文献】

「大学進学率の推移」 文部科学省

「コピーペルナーV2」 株式会社アंक

「学士課程教育の構築に向けて（答申）」 中央教育審議会



図 3 2016年度「ゼミ通信」例



図 4 2017年度「ゼミ通信」例



